

地域おこし協力隊活動記

あの有名デザイナーが！

皆さん、こんにちは。地域おこし協力隊の菅原です。

この頃一段と寒くなり、冬の訪れを感じる日々です。私が小野町に来てから1年。とうとう季節を一巡しました。思っていたより暑くない夏の日々や気温というより風が冷たい冬の寒さを体験し、わずかばかりですが小野町の気候を肌で感じることができました。暑いよりは涼しい方が好きなので、暮らしやすい気候です。

最近の協力隊活動としては「ふくしまクリエイティブクラフトアカデミー」の第一期受講生に選出されました。10月5日に行われた開講式では、世界的に有名なファッションデザイナーであるコシノジュンコ氏の講演が行われ、独創的なデザインのアイデアは、「対極の美のバランス」にあると語られました。会場内には白と黒、丸と四角の器や線と面といった、対極にある形を使ったコシノジュンコデザインの福島県の伝統工芸品が展示されていました。数百年続く伝統工芸品を新たにデザインし直すというのはなかなか難しいと思います。美しくデザインされたそれらの工芸品は、これからの福島の新たな姿を見せてくれるようでした。



漆器の新たなデザイン

会津木綿の新しい形



ふるさと小野町会

ふれあい通信



渡辺 誠

- 本町出身
- 埼玉支部

仙台屋の中華そば

アブラゼミが鳴き屋下がりをとうに過ぎるも、暖簾のれんの下がる引き戸を開けると数十人の客で未だ席は埋め尽くされている。「普通？大盛り？」「普通で」、促され四人席に荷を置き給水器からなみなみと水を注ぎ大きく飲み込む味覚にて記憶が手繰られる。

ここ「仙台屋」の裏に細道があり、井戸があった。その主のようなランニングの年長が力を込めてポンプを上下すると、ホースから

勢いよく地下水が弾ける。「口さは付けねっばい」透き通る冷水が陽光に照り返った飛沫と共に喉を襲い潤す。今と同じように暑い夏の記憶。

着席し正面に見る品書きは二品。やがて「普通」がテーブルに。麺とスープのみの有り様なる中華そばであり、いや麺がスープを凌ぎ器を覆い尽くす。焼豚、メンマ、鳴門、分葱が控えめに添えられたこれぞ中華そば。食べるほどに小野町に包まれる。流行りなる具だくさんの装飾は無意味。それらはまさに愚の骨頂だ。今あるこの味を楽しむためにのみスープがあり麺がある。おいしい。そしてうれしくも、普通盛でさえ麺はたわわにその存在を誇示、飽のない振る舞いが持続する。旨さに目を閉じると、小野町が甦る。記憶は終わりを知らない。汗をかき、それでも遊んだ夏の日長い午後。汗だくとなり最後の一滴を飲み干すと汽笛の「ぼお」という響きと、鉄興社から立ち昇る、太く熱い煙突の煙が甦った。

ありがとう、仙台屋。ありがとう、小野町！